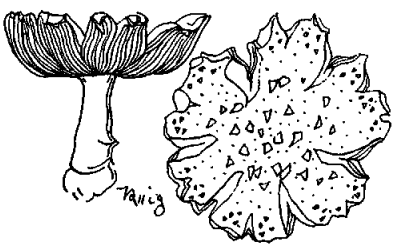

茸随想

大谷吉雄

野山のブドウやコクワが色づきはじめナナカマドの実が赤くなりはじめる頃になると、毎年私は、数人の人々から「札幌近郊で茸狩りをするには、どこがよいだろう」とたずねられる。

最近のように、おいしい食べ物が年間を通じて店頭を賑わしていても、野山の植物に季節を味わうほのぼのとした楽しさはなんとも捨てがたく、秋の味覚の筆頭に茸をあげる人は数多い。秋晴れの一日、じゅうたんをしきつめたようなカラマツの落葉をふみ、あるいは広葉樹の落葉をふみならして林の内を歩むのは実に心地よく、まして、にょきにょきと生え出した茸をみつけたときのうれしさは格別なものである。

さきほどの質問に私は一応、野幌の森林や定山溪沿線の二、三カ所をあげはするものの、いつも大丈夫期待されるだけの収穫をあげて、秋の一日を楽しんでくれたであろうかとの不安をぬぐえない。札幌近郊では、このような場所が年々少なくなってくるのは本当に残念なことである。

私が子供の頃、といってもせいぜい四十年前にすぎないのだが、住んでいた鉄北の家の玄関前の路上に一本のエルムの木があって、この木のかなり高いところに、毎年黄色の美しい茸が株になって生えるものであった。勤めから帰った父が旗竿でつつきおとし、巧みに受けとめてその夜の食卓を賑わしたのがなつかしく

思い起こされる。

その後、昭和のはじめ移り住んだ桑園の家では、道路わきに草原があったが、雨のあがった直後のある秋の日、たくさんの茸が生えているのを見つけ、手カゴに一杯とってお隣りなどにも分けて夕食を飾ったときの誇らしいよろこびは、いまに忘れない。

この黄色い茸がタモギタケで、後の茸がナラタケ（俗称ボリボリ）だと知ったのは、その後、北大農学部植物教室の学生となってからのことだが、学生の頃、一年上級の赤塚耕三さんと二人で上野幌から野幌まで、森の中を歩いた秋の日の思い出もなつかしい。当時も現在と変わらぬりっぱな歩道はついていたが、その両側は全くの原始林で、この林内になんと多種多様の茸が生えていたことか、二人は夢中で採集し、その整理に数日かかったものであった。

札幌の人口も当時の五倍以上になり、大都会に発展した札幌のまちなかに、茸の生えるところなど望むのが無理なのはよく承知しているが、大都会に発展すればするほど、その近郊に茸狩りに秋の一日を楽しめるような場所がほしいものである。

§

茸はいうまでもなく湿り気の多いところに生えるが、かなりの種類は木の根に菌根をつくるのであり、また、落葉の堆積した腐植の多い土上に生える種類も多い。つまり、雑多の樹木が生え繁った天然林こそが茸発生の適所で、その種類も量も豊富である。

そして天然林内の腐朽木や堆積物は、茸などの菌糸や細菌の繁殖によって分解して土に帰り天然更新の場を提供する。天然林の一部が残されても、まわりの木が切り倒されて陽あたりがよくなってはすでに水分の保持も菌の繁殖にはじゅうぶんでなく、この林も次第に荒廃するのをまぬがれない。一度荒廃しはじめた林を元にかえそうとしても、大変な努力と莫大な年月を要するのはよく知られるとおりである。

かつては野幌はおろか、円山でも藻岩でも、札幌の郊外に天然林をもとめるのに苦労はいらなかったが、最近では野幌さえすでに昔日のおもかげがないのは淋しい限りである。なんとか一日も早く、残された天然林をできるだけそのままの形で、末永く存続させる方策の実行に移されることをねがうものである。

人口の割り合いに国土のせまい日本、工業国として近年めきめきと発展をとげ

つつある日本で、このようなねがいは実情を知らぬものとの議論は一応理解できる。しかし、昔から自然に親しみ、自然を友としてきた日本人が、将来親しむべき自然を完全に失うとしたら、必ずや悔いは千歳に残ると知る人は少なくあるまい。

§

五年ほど前、私が一年間を過ごした北米のインディアナ州は、北米大陸でもとくに平坦なところだが、現在はいわゆるコーンベルトの一部で見渡す限りのトウモロコシ畑である。文字どおり太陽はトウモロコシ畑より昇り、トウモロコシ畑に沈む風景は、じつに雄大ではあるが単調である。

しかし、この州にはターキーラン、シェドウ、ポケーゴンなどと名づけられたステートパークが実に多い。そしてインデアナポリス、ラフィエット、ブルミントンなどの都会から約一時間ほどのドライブで訪れることができる。その面積は小さなもので約千エーカー、大きなもので約二千エーカーで、ピクニック場やキャンプ地、駐車場などは設けられているが、その大部分は開拓前の自然がほとんどそのままに残されているものと見受けられた。

そしてそこには、適度に手入れされた六〜十本ほどの周遊歩道が設けられ、易・中度・難と三段階の表示がほどこされていて、難の歩道ではちょっとした沢登りの気分も味わえる。易の歩道では幼児を伴った若い家族づれを、中度の歩道では楽しげな恋人達のアベックを、そして難の歩道では高校生の一群を見かけるのがつねであった。

いずれの歩道もユリの木、ダグウッドなどの木が花をつける初夏、ツリフネソウや各種のランなどが咲き乱れる夏、そして紅葉の秋と四季を通じて訪れる者の目を楽しませるが、インディアナ州の州鳥とされているカーデナルをはじめ、各種の野鳥のさえずりも歩道を歩む人々の心をなごませてくれる。

公園入口の管理室で、園内の樹木や鳥の解説をしたパンフレットが売られていたのもさすがである。秋にはたくさんの茸が生えており、秋の一日を楽しんだ私ども日本人は、茸汁の夕食に舌づつみをうったのはいうまでもない。

（北海道教育大学教授）